ブルーダイヤモンド

瀬戸内晴美

瀬戸内晴美

ブルーダイヤモンド

ブルーダイヤモンド
瀬戸内晴美
© Harumi Setouchi 1987

講談社文庫
定価440円

昭和62年5月15日第1刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183982-9 (0)

ブルーダイヤモンド

目次

ブルーダイヤモンド　7
嫉妬やつれ　73
死面　93
三宅坂　121
男客　157

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

冬銀河 173
惑いの年 237
ひめごと 261
夜の椅子 279
驟雨(しゅう) 301
後書き 328
年譜 331

ブルーダイヤモンド

ブルーダイヤモンド

一

芹沢奈美が、その日、一年ぶりで皇居の中にあるパレス乗馬倶楽部を訪れたのは、計画的なことではなかった。

例年より長い梅雨がようやくあけたその日は、朝から三十度を軽く越す暑さだった。十時に、パレスホテルのロビーで、ウイルソンの秘書から先日売った絵の代金百三十万円の小切手を受けとると、奈美のその朝の仕事は終った。ニューヨークと東京を一年に何回も往復している貿易商のウイルソンは、絵を買うのが唯一の趣味だった。もっとも彼が日本で買う絵の半分は、帰国した時土産用にする日本の風景画や、美人画だったけれども、無名の画家のでは気に入らないところが、奈美の画廊の上得意であるゆえんだ。家柄や由緒に弱いアメリカ人の通例にもれず、ウイルソンも、奈美が日本画の巨匠として外国にまで名のひびいている故芹沢玉泉の愛娘だということで、それまで買いつけていた画廊から、銀座裏の奈美の店へすっかり籍を移してしまった形である。こういう客は外にもあった。

奈美は、父の名を、商売の上で出来るだけ出すまいとしているけれど、やはり、大きな取引の場合には、思わぬ所で、芸術院会員の亡父の名が七光りになってくるのを認めないわけにはいか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なかった。そしてこのごろでは、奈美自身、適当に父の名を利用してかけ引するほど商売気も結構出来かかっていた。

奈美は、受取った小切手をしまいかけたハンドバッグのかくしポケットの中に、去年の夏から入れたままになっているパレス倶楽部の会員証を見出した。今朝、何気なく、今年はじめて使うパナマ製の抱えハンドバッグに替えてきたのだった。真珠色にマニキュアしたしなやかな指先でつまみだした薄緑色の会員証に、大きく去年の年が刷りこまれているのを見つめ、奈美はちらと口を歪めた。さりげなくそれをハンドバッグにもどすと、かわりに煙草をひきだし、火をつけた。

このホテルのロビーの前庭は皇居の石垣と濠を借景して造られている。ガラス戸ごしに、青い濠の水と、石垣の蔭で、ぐったり羽をとじあわせたまま身じろぎもしない白鳥が見える。濠の水もこの暑さに、ぬるんでいるのだろうか。奈美の椅子の位置からは黒い大手門が見えた。

通いなれた門の中の皇居内の倶楽部への道が、奈美の目にはありありと浮んできた。

灰色の石垣、車の通る度、黄塵のように埃をまきあげる乾ききった地面。どこまでも奥深くつづいている欝蒼とした木立の緑、そしてあのセピア色の古ぼけた倶楽部ハウスの建物や、森閑とした日盛りの馬場の静寂――

烈日をはねかえしている馬場の黄色い土や、明治か大正時代の小学校のような厩舎の細長い建物――フィルムをひろげるように次々と浮んでくる倶楽部の情景をなつかしんでいるうち、奈美は、急になつかしい馬の匂いに全身が包まれてくるような気がしてきた。すると、こりこりした

馬の肌としなやかな毛並の感触が掌にいきいきよみがえってくる。
奈美の瞼に、滝川浩平の浅黒く引き緊った俤が浮んできた。
奈美は、その俤を払いのけるように、軽く首をふると、すっと立ち上った。一年ぶりで、倶楽部を訪ねる決心がその時ついたのだった。
奈美が席を離れて歩きだすと、ロビーの人々の視線がいっせいに奈美に吸いよせられた。
いつ、どこを歩いても、奈美の和服姿は人目をひいた。その日の奈美はひときわ水際立ってすがすがしかった。しつけをとったばかりの越後上布に、鮮かな若葉色の紗に銀糸でとんぼをとばした帯を、ゆるく締めていた。
清涼感が、奈美のしなやかな軀の中からふきあふれていた。
人の賞讃の目には馴れていた。奈美はそんな視線を微風のように受け流す。
「いいお召ものね」
人にほめられると、おっとりした鷹揚さで、素直に微笑み、
「そうどすか、おおきに」
と、柔かな京ことばで答える。
普段、奈美は標準語を使ったが、ごく親しい間柄とか、相手によっては商売の客に対しても、京都弁の効果があがる時には、わざとそれを使うことがあった。
古代雛のような古典的な奈美の顔立は、どちらかというと、冷たい印象を与える。一重瞼の切長な、やや眦の上がった目や、貴族的な鼻の線のせいもあった。奈美の柔かな関西弁や関西なま

りは、奈美の容貌の冷たさや、あまりの容姿の水際だったすきのなさから、人に与える一種の圧迫感を緩和するのに効果があった。

ホテルの外に出ると、むうっと熱気がおしよせてきた。目と鼻の先を車で大手門に乗りこんでいく。門の際の門衛の詰所で、制服の警官が三人物々しく詰めていた。

車の窓から見せる奈美の会員証を見て、若い童顔の警官が露骨に愕いた表情をかくさない。乗馬をする女のイメージと、奈美の着物姿が一致しないのだ。

奈美は、商売用の微笑を無意識に顔につくり、彼等の横を通りぬけた。

ガランとした倶楽部ハウスへ入っていくと、殺風景なハウスの中に、花束が投げこまれたような光りと匂いがゆれた。

「ほう、これはお珍しい」

「いったい、どうしてらしたんです」

「今日は乗りますか」

事務所で事務をとっている人々から一せいに口々に声をかけられて、奈美は笑いだした。

「商売に馴れないものですから、さっぱり閑がみつかりませんの。もう足が太くなってしまって靴が入らないんじゃないかしら」

奈美は、一人一人に万遍なく笑みこぼれた顔をむけながら、答えていた。会員証はその場ですぐ書きかえられた。

「今は午前中でしょ？　馬場？」

「ええ、もう、御婦人たちは蔽馬場の方へ入っておられますよ」
「あらそう、拝見してゆこうかしら、どなたがお見えになっていらして？」
「ローズさん、林さん、井野さん、沢田さん……久次米さんも見えてましたね、たしか」
みんな奈美の親しい婦人会員ばかりだった。
大会社の社長夫人や銀行支店長夫人、莫大な遺産をかかえた外国人の未亡人等、閑と金をもてあます夫人たちが、来週はもう避暑地へ行くという最後の名残りに乗馬を愉しんでいる。
「馬は？　みんな元気？」
「ああ、そうそう、あなたになついていた秋月が破傷風で二ヵ月前死にましたよ」
「まあ、可哀そうに」
奈美の目に、しっとり涙がたまってくる。外形のなよやかさに似ず、芯の強い奈美が、涙をうかべるのは馬のことぐらいだった。
その時、馬場の陽盛りの中から歩いてくる乗馬服の女に出逢った。
「おお……めずらしいひと！」
上下純白の乗馬服に、鞭を持った小柄な女が叫んだ。石村ローズの、崩れる前の黄薔薇のようなけだるいなまめいた顔が、微笑した。
もう六十歳をとうに越えている筈のローズの正確な年齢を誰も知らない。フランス人を母系にもつ混血児のローズは石村子爵の未亡人で、再婚したイタリア人の莫大な遺産を持っていると噂されている。

十七歳のとき、天覧競技に横乗りのまま障碍を飛んだという華やかな歴史を持つ人として、倶楽部の中でも特別扱いされていた。エキゾチックな目鼻立に、漆黒の瞳と髪だったのが、いつのまにか黒髪は純白になり、それを前髪だけ、薄紫に染めている。紫のショートカットが、湯の中にひらく蘭の花のようなはかない白さに皺ばんだ皮膚に、奇妙にしっくり似合っていた。さすがに肉の落ちた唇のまわりが淋しかったが、濃い臙脂のルージュを、年にこだわらず、くっきりと描き、乗馬服の胸からは、黒水仙の香りをただよわしている。

粋な老貴婦人は、奈美の方に、大形に片手をさしのべてきた。

「おお、あなた、ますますきれいになりましたね。すばらしく、きれい、なにか、いいことありますね」

ローズは、きゅっと片目をつぶってみせた。さる宮さまから、某々男爵に至るまで、およそ大正時代馬に乗った男で、若き日のローズの馬上姿に憧れなかったものはないといわれる艶名の主だけに、七十近い今になっても、ローズの瞳は、そんな色っぽい想像をめぐらせる時、いきいきとなまめいてくる。情事に特殊な嗅覚を持っていて、誰よりも早く、奈美と浩平の関係も見抜いていた女だった。今日のローズも奈美をみたとたん、何かいたずらをたくらんだようないきいきと嬉しそうな表情にかがやいてきた。

「今から、部班が始まるのよ、みていくでしょ？　乗らない？　お乗りなさいよ」

二

奈美を初めて馬の背に乗せたのが、滝川浩平だった。

浩平は奈美の父の玉泉の絵のファンで、何枚か玉泉の絵を買った関係から、いつのまにか世事に無頓着な玉泉の財政管理のルーズさを見かね、先祖伝来の山林の調査やら、奈良にある家作の整理やらを買って出るようになった。気がついた時には、芹沢家には親類以上に密接な関係を持つようになっていた。

玉泉は、大和の別荘に娘とあまり年のちがわない祇園出の後妻をつれて引きこもったきり、京都の本宅に帰ることもなかった。女ばかりの三人姉妹は、早くから自分たちだけで自分の生活を守る個人主義を身につけていた。上の姉二人は、東京の女子大を出るとそれぞれ相手を見つけて東京で結婚していた。一人だけうんと年の開いた末娘の奈美は、神戸のカトリックの女学校の寄宿舎に入り、そこを出ると、京都の南禅寺にある玉泉の本宅にばあやと二人で住み、芸大の日本画部に入っていた。奈美一人が玉泉の絵の血筋を受けているようだった。

浩平がはじめて玉泉に頼まれて、南禅寺の奈美を訪れたのは、奈美がまだ画学生の時だった。古風な、大名屋敷のような玄関へ無造作に出て来た奈美を仰いだ時、年甲斐もなく浩平は愕きをかくせなかった。

その日、目のさめるような鮮かな紫の大柄な矢羽根のお召に、黄色のどっしりした縮緬の三尺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com